（第３種郵便物認可）

旧制松江高等学校教師

カルシュの足跡を追って

◇6◇

若松　秀俊

家庭生活

（上）

父娘のきずなと心の交流

前回までに述べた家屋で、彼らの生活が始まった。大正十四（一九二五）年の秋のことである。それから一カ月ぐらい経って暮らしが落ち着いてくると、周囲のことが少しずつ分かってきた。

フリッツは故国と全く雰囲気を異にする人家や景色に興味を覚えて、動きだした。日曜日には必ず散歩にでかけた。奥谷の官舎の近くは静かなところだ。ここに来ると不思議なくらい不安が消える。気持ちが落ち着くのだ。どうやら、心の静けさを感じさせる何かがあったようだ。官舎には十四年間生活した。

その間、松江高校教員の紹介で中村（石飛）フデ子が長女メヒテルトの日本語教育に携わった。「日本語の教育はやや手こずった」と、彼女が昭和四十三年のＮＨＫインタビューでメヒテルトの直前で自ら語っている。

フリッツがメヒテルトをあえて日本の学校に行かせなかったのは、ドイツ人としての教育を守りたかったからなのか。今となってはその理由は分からない。とにかく、日本語以外は両親が直接に教えた。隣のウッドマン家では、母親が日本人だったからだろうか、子供が北堀の小学校に通っていた。

写真は昭和十（一九三五）年ごろに撮ったものである。そのころの二人にとって、和風の家具・調度品はよほど珍しかったのであろう。いろいろなツテから、着物、金属手鏡、掛物、人形、仏像、置物、陶器などを手に入れたという。

松江は古い土地柄であり、これらを手に入れることは比較的容易であった。江戸時代の手鏡はエンメラが大事にしていたという。箱に入った人形のセットはメヒテルトのお気に入りであった。急須や仏像は母の着物などと一緒に、現在次女のフリーデルンが保管している。

フリッツと風邪療養中の妻エンメラ

松江の気候はエンメラには合わず、病気がちであった。また彼女は、きちんと物事を処理しなければ気の済まない人であったようだ。お手伝いもその点は大変だったようだ。

メヒテルトはそんな母に、感覚的に違和感を感じていたという。その分、フリッツは孤独だったのだろうか、気持ちがメヒテルトに強く傾いていったようだ。一方、エンメラの愛情はフリーデルンの方に向いていたようだ。

普段、エンメラは庭の手入れに余念がなかった。家の天床はいつもネズミの運動会であった。その対策として猫を飼っていた。犬も飼っていたが、最初は黒いポチ、その後は斑点のあるフレッキーだった。

母衣町にカトリック教会の神父だったハーマッヘルが居た。彼はベルギー出身でフランス語とドイツ語を話した。昭和七年春から夏にかけてフリッツが一時帰国したとき、臨時にドイツ語を松江高校で教えたことがある。

プロテスタントのエンメラは、最初は宗教上の理由から彼を警戒していたが、後にはうち解けたという。とにかく、家族以外でたった一人のドイツ語での話し相手であった。

（東京医科歯科大学大学院教授）

＝文中敬称略＝